

第13回 外国語コンテスト

英語部門

英語部門は11月27日（火曜日）に実施され、12名の参加者が自作の英語スピーチを発表した。

審査員には、ジョン・ハミルトン先生と祖父江美穂先生をお迎えした。十分な準備と練習の成果が伝わってくるスピーチが次から次へと披露され、そこから入選者を選ぶというたいへん難しい選考を、審査員の両先生にお願いすることになった。

審査の結果、第1位 野々山恵さん、第2位 三浦紳吾くん、第3位 西部香里さんが入賞者として選ばれた。

野々山さんの“Living in the Global Community as Japanese”は、英語を学びたいと思ったきっかけや高校時代のオーストラリアでの学びを踏まえ、単に外国語を学ぶだけでは十分でないことが、説得力のある文にまとめられ、“To be a world citizen, I want to study hard and broaden my knowledge about the world in the years to come.”と締めくくられていた。三浦くんの“My Precious Experiences in Australia”は、オーストラリア旅行中での会話や図書館やスーパーマーケットに行ったこと等の具体例を挙げながら、異文化体験を生き生きと描いていた。西部さんの“KY”は、「空気読めない」という流行語をとりあげ、“KY”が何かということ学んだ状況を見事に描写し、そこから学んだことを上手にまとめている。

入賞者以外の作品も力作揃いであり、今後もそれぞれに考えたことを深めて英語で表現するという機会をもってほしいと思いつつ、2007年度のスピーチコンテストを終了した。 (小坂敦子)

ドイツ語部門

2007年度の名古屋語学教育研究室主催第13回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2007年12月4日（火曜日）の午後4時45分より名古屋校舎中央教室棟3階にある第1研修室でおこなわれました。その結果を簡単ですが、報告したいと思います。

今回課題としたのは、統一テキストの中のReihe 6の„Was willst du eigentlich werden?“（「あなた、いったい何になるつもりなの？」）という題名のダイアログです。2人の男女（オーストリア人女性とイタリア人男性）が将来について話をするという設定ですが、決して固い内容ではなく、ユーモアのある対話に仕上がっています。

例年であれば2年生以上を対象にして参加者を募っていましたが、毎年参加者のレベルが高くなっていますので、今年は1年生から積極的に参加を呼びかけました。その結果、ドイツ語部門としてはかつてない多数の申し込みがあり、21名もの参加者となりました。そのうちの半数近い9名が1年生でした。

審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私（島田了）の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

授業で扱っているテキストとはいえ、まだまだ学習時間の少ない1年生にとってはかなり難しい課題だったといえるでしょう。基本となる発音・アクセントの確かさはもちろんのこと、今回はユーモアのある対話ということで、より表現力が必要とされます。それでも参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、互いの学年を意識させない高いレベルでの完成度を競う結果になりました。

参加者いずれも優劣つけがたく、本当にわずかの差で順位を決めざるを得ませんでした。結果は、第一位（優勝）大橋一寛さん（07J1349）、第二位水野圭助さん（06J1162）、第三位鷺見真一さん（07J1126）となりました。上位三名のうち2名が1年生ということで、集中して練習したものと思われ、素晴らしい結果を出しました。

他の外国語に比べて履修者の少ないドイツ語部門で、今年はこれだけの参加者があった事は大変素晴らしいことです。ドイツ語の履修者の関心や質の高さは大いに評価したいと思います。今後もこの傾向が続くように努力を重ねたいと思います。法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心としたキャンパスのため、相変わらず外国語の1クラスが40名を超えているなど、決して満足のいく外国語教育の環境でない事は変わりません。それにもかかわらず、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員として大変うれしく思います。

ドイツ語は、実用という点では英語や中国語などに比べてその利点が見えにくいと思います。しかしそれ以外にも印欧語の文法的特徴が多く残っているため、外国語の学習をそのものとして楽しむことが出来る言語ではないかと考えています。1人でも多くの学生さんにこの楽しみに気づいてもらえたらと願っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。（島田 了）

フランス語部門

2007年度のフランス語部門のコンテストは12月7日（金曜日）に名古屋校舎の中央教室棟3階の第1研修室にて16時40分から実施された。昨年は国際コミュニケーション学部のラッセン先生が海外研修中だったので、残念ながらネイティブの先生を審査委員長としてお迎えすることができなかつ

たが、今年度は例年通り、ラッセン先生に審査委員長を務めていただいた。名古屋校舎の学生としては初めて、ネイティブの先生に発音等を審査していただくことになった。気のせいかな、出場する学生はもちろん、フロアに50人ほど集まってくれた学生たちも緊張しているようであった。今年度は14名の学生がコンテストに出場してくれた。

今年も例年通り、予選と本選に分けて行い、予選では課題の朗読を行ってもらった。今年の課題には、フランスの詩人であり、脚本家であり、映画監督でもあるジャック・プレヴェール（Jacques Prévert）（1900～1977）のバルバラ（Barbara）を選んだ。少々長い作品なのでおよそ半分くらいの分量を朗読してもらうことにした。

今年は一年生がとてもよく練習してきたので、予選では上級生の方が圧倒される形となった。エントリーした14人のうち、予選を勝ち抜いたのは、3年生が2名だったのに対して1年生は4名となった。

本選では同じバルバラの残りを朗読してもらうことにした。学生諸君もこれは予想していなかったようで、さすがにフランス語に慣れている上級生の方が実力を見せつけたが、2位に1年生が入賞したことは、驚異的なことと言えるだろう。入選者は以下のとおりである。

第1位 05M3607 橋本 彩香

第2位 07M3135 三輪 真也

第3位 05M3552 尾関 洋

橋本さんは正確な発音に加えて、フランス語独特のイントネーションや落ち着いた話しぶりが見事であった。2位の三輪君は一年生とは思えないほどしっかりした発音で、普段からよく勉強していることがうかがえた。3位の尾関君は上位の二人と比べても遜色のない立派な朗読だったが、ほんの少しミスをした点が惜まれる。

今回のコンテストでは試験的に、フランス語上級クラス履修者によるフランス語の寸劇を実施してみた。『のだめカンタービレ』に出てくるフランス語の会話部分を履修者が暗記して、小さな劇を行ってみた。いくつか予想外のトラブルが発生

して、必ずしも練習の成果を十分に発揮できたとは言いが、さらに工夫を重ねて、フランス語の勉強は楽しいことを学生諸君と一緒に伝えていきたいと思う。(中尾 浩)

中国語部門 (法・経営)

第13回外国語コンテスト中国語部門 (法・経営) は、2007年11月20日 (火) 16時40分から行われました。

審査は矢田先生と鄭の2名が担当しました。今回は前回より参加者が多く、激戦だったため、とくに三位を決めるのには時間がかかりました。厳正な審査の結果、次の3名を入賞としました。

- | | | |
|-----|---------|------|
| 第1位 | 03M3371 | 宮本貴文 |
| 第2位 | 06J1410 | 渡邊 淳 |
| 第3位 | 07M3570 | 堀 晋悟 |

例年の通り、1年生を中心とした基礎部門と2年生を中心とした応用部門に分け、それぞれの課題文を朗読してもらい、発音の正確さと朗読の流暢さを評価の対象としました。基礎部門の朗読課題は「我的一天」(私の一日)で、応用部門は中国の笑い話「买鞋」(靴を買う)でした。今年の基礎部門の参加者は32名で、応用部門は12名でした。第1位の宮本君は、中国留学も経験している実力者で、発音の正確さと流暢さにおいてはダントツに優れていました。第2位の渡邊君は、そのきれいな声調がいまだに耳に残っています。もう少しリラックスして、流暢に朗読できていれば、1位の宮本君と激戦となったはずですが、第3位の堀君は、32名基礎部門参加者の中で唯一入賞した学生です。中国語の勉強が始まって、まだ8ヶ月ですが、その安定感のある流れのよい朗読ぶりは今後おおいに期待されます。

今後ともより数多くの学生がこのような知的な刺激舞台に登場することを切に願っています。

(鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

2007年12月6日 (木) 13:30から、課題部門9名、自由部門3名の合計12名が参加して行われました。審査は昨年同様、顧明耀先生、高明潔先生、安部の3名で行いましたが、今回は宣伝不足もあったのか参加者が少なく、昨年の半数以下となってしまうことはとても残念でした。ただ、内容的にはすばらしい発表が多く、今回も審査には苦労しました。

課題部門は、「秀才吃包子」という文章を暗読してもらいました。内容は、昔中国に一人の「秀才」がおり、彼の書く文章が長いだけで中身がないので、妻が一計を案じ、餡の少ない肉饅を作って食べさせ彼を諷めたというものです。出場者は、発音が正確であるばかりでなく、「秀才」夫婦のやり取りを面白おかしく表現して、思わず笑ってしまうほどでした。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- | | | |
|----|---------|-------|
| 1位 | 07C8016 | 遠藤 茜 |
| 2位 | 07C8014 | 上野 美紗 |
| 3位 | 07C8060 | 出口 慎也 |

自由部門は3名の参加でしたが、レベル的には例年と比較しても遜色のないものでした。ただ参加人数が少ないため、第1位のみを選出となりました。

- | | | |
|----|---------|-------|
| 1位 | 06C8084 | 盛田 美帆 |
|----|---------|-------|

盛田さんのスピーチは、「中国火車上の感受 (中国の列車で感じたものは)」というテーマで、中国短期留学中に列車で旅行し、そこで出会った人々との暖かな交流が、彼女に列車の旅の良さを再認識させ、また父親との間にあったわだかまりをほぐすきっかけにもなったというお話でした。内容的にも良かったのですが、中国語のすばらしさに審査員一同本当に感心しました。盛田さんは、第21回全日本学生中国語弁論大会にも出場し第2位となっています。(安部 悟)

韓国・朝鮮語部門

07韓国・朝鮮語コンテスト「本選」は、12月4日(火)16:40から実施された。参加者は2年生・3年生の30名。以上とは別に、過去第一位に輝いた田中優貴君の特別参加もあり、1年間におよぶ韓国姉妹校交換留学の成果を後輩たちに存分に示してくれた。この場を借りて、感謝の意を表明したい。

審査は韓国語担当教員の韓 銀暎先生、同、常石の二名が担当した。十分に練習を積んだ参加学生諸君の熱のこもった発表が続いた。実力伯仲のため、毎回のことながら審査に苦しんだ結果、入賞者は以下のごとく決定した。しかし、入賞を逃してもその実力差は「極小」という学生が多く、審査員を喜ばすと同時に苦しめた。

第一位	05M3178	チョウ 趙	ヒョンジュ 顕樹
第二位	04M3244	西村	一騎
第三位	06M3536	渡辺美智子	
(特別参加)	04J1375	田中	優貴

第一位 趙 顕樹君の発表原稿を後に掲載しているが、その内容は、趙君とサッカーとの出会い、および02日韓共催ワールドカップ大会の経験をまとめたものである。補足して言えば、「日本 T V.」の視聴率調査によると、日本テレビの2001年以降のあらゆる番組中、第一位視聴率を占める放送が同ワールドカップにおける「韓国：ドイツ戦」であったと言う。つまり、日本の試合ではない「韓国のサッカーの試合」が、日本テレビの今世紀の第一位視聴率に輝くという。趙君は、最後に「このようにサッカーは、皆を一つにすることができる美しいスポーツだと言えるでしょう」と結んでいる。スポーツが国家高揚目的やナショナリズム示威の目的に堕している昨今の世界情勢にあつて、「スポーツ」本来の姿とその素朴な本質について趙君は訴えている。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない学生を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自分の体験を盛り込み、身近な出来事を通して考えたことを、自分のことばで述べるのが課題でした。

法学部・経営学部・現代中国学部の1年次の留学生は毎年全員参加でこのコンテストに臨んでいます。50名近くになりますからクラス予選を行います。日本語の3クラスからそれぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。本選へは他の学年の留学生も自由に出場できますが、今回は申し込みがなく、2007年12月6日(木)に1年生9名で競うことになりました。

今年もさまざまなトピックがありました。印象的だったのは勉強やアルバイトで苦労はしても、経験の中で日本人の責任感の強さや思いやりといったものを学んだという肯定的な意見が多かったことでした。異文化の中で学ぶ留学生たちの心情が少し距離をおいて語られているという点で、例年にも増して説得力がありました。イントネーション・間の取り方などのスピーチの基本だけでなく、アイコンタクトなど、聴衆とのコミュニケーションを大切にするという取り組みをしました。クラス予選でのスピーチも内容豊かなものとなり、その結果、レベルの高い本選となりました。

審査は、日本語科目担当教員2名(梅田・架谷)、学生審査員2名(留学生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約50名の投票によって行われ、拍手と熱気の中、3名の入賞者(敬称略)が決定しました。

- 第1位 07C8205 王 宜浩(オウ イジェ)
「おばあちゃんの知恵」
- 第2位 07C8208 姚 懿(ヨウ イ)
「私から見た日本人」
- 第3位 07C8179 李 雪(リ ユキ)
「外人」

次回の外国語コンテスト日本語部門には、日本人学生のみなさんもぜひ聴衆の一人として聞きにきてください。自分の国について留学生が話すのを聞けば、きっと意外な発見があるでしょう。

(架谷真知子)



外国語コンテスト入賞作



英語部門

第 1 位 Living in the Global Community as Japanese

07C8131 Megumi NONOYAMA

Today we are living in the global society and some people are actively engaging the international community. My aunt, too. She's working as a lawyer in America.

When I was young, I sometimes played with cousins, speaking only English. Because my aunt married to American, my cousins can't speak Japanese. Thus I sometimes couldn't communicate with them. The language barrier was impeding our communication. Such an experience made me aspire to communicate smoothly with people in English.

In my high school, I had an opportunity to study in Australia. In Australia, I almost enjoyed my stay, but I also felt there was still a language barrier. All classes were conducted in English. I couldn't understand what teacher said. Moreover, I was shocked by the fact that I didn't know anything about Japan, though I am Japanese and grew up in Japan. For example, I had a chance to learn memories of World War in Australia. I met a retired soldier and talked with him. He had fought against Japan. He strictly said to me, "During the war, I hated Japan. Japanese troops killed my friends. You aren't wrong, but you have a responsibility for what Japan did." I couldn't reply to him because I was totally ignorant about the war. Finally, he said to me, "Your responsibility is knowing the past, and that will promise us a brilliant future. Good luck to your future." As he said, we have a negative legacy of the World War that many Japanese pretend not to see. But I think we must face this fact. What is needed is a proper understanding of this negative legacy and accepting it. I think these efforts will help us understand who